

ブライトン『おちやめなふたご』シリーズ

この連載も 22 回となりました。何人かの人から、どうしてブライトンの『ふたごなふたご』シリーズを取り上げないのか尋ねられました。当然だと思います。双子が出てくる作品で思いつくものはなんですか、と質問すれば、たいていの人がこのシリーズを挙げるくらい親しまれているからです。また、どんな本屋さんに行っても必ずとっていいほど棚に並んでいますし、実際に子どもたちにも読まれています。ということで、今回は満を持して待っていた(?)ブライトンの名作シリーズを取り上げたいと思います。

サリバンさんの家には、パット(パトリシア)とイザベルという一卵性の女の子の双子がいました。中学を卒業して高校に入りますが(イギリスでは公立では 15 歳から)、自分たちが考えていた学校(お金持ちのお嬢さん学校)ではなく、いろいろな階級出身の人が在学するクレア学院に入ることになり、ふくれています。どうやら両親は、二人に普通感覚(「良識」と言っています)を学ばせ、少し思い上がったところを直そうと考えたようです。

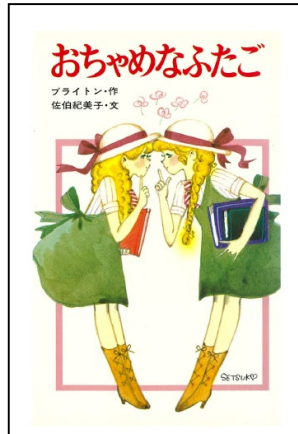
嫌々進学したこともあり、イザベルもパットも最初クレア学院の生活になじめませんでした(イギリスには全寮制の学校が沢山あります)。前の学校では、優秀な双子ということで何においても注目され、人の輪の中心でしたが、ここでは人間関係も最初からやり直しです。つい前の学校のことを引き合いに出してしまったり、自分たちのやり方を通そうとしたりします。とりわけパットは気の強いはっきりした性格なので、クラスの生徒や上級生ともぶつかりがちです。イザベルは、ここでのやり方にあわせていった方がよい気がします、どうしてもパットに引きずられてしまいます。

でも、授業中のストーブにかんしゃく球を入れるイタズラや真夜中のパーティーなどを通じて、陰では「意地っ張り」と呼ばれていた二人ですが、段々とクラス・メートの信頼を得ていきます。そうした中、ラクロス(アメリカ・ネイティブ起源のボール・ゲームでホッケーの空中版)の対抗戦に一年生から選ばれた選手二人のうち一人に入ったイザベルは大活躍し、クレア学院の生徒としてしっかりと根を張ります。それから友だちの盗難事件のとりなしを院長先生にしたり、崩壊気味になっている授業に悩む教師へやさしい手紙をみんなで書いたり、友だちと夜こっそりと抜け出してサーカスを見に行ったりと人間関係を広げ・深めていきます。いたずらを一緒にしたり、共通の秘密を持ったりすることで友情が深まっていくということは、世界中どこでも共通しているようです。最初双子二人きりで初めての世界に対抗するかのように防御の壁を築いていたイザベルとパットでしたが、その壁も今では跡形もなくなり、むしろ友だちの心の壁を崩す援助すら自然にできるようになりました。

こうして、あれほどクレア学院に行くのが嫌だったパットとイザベルですが、クリスマス休暇で家に帰るとき、「また帰ってこれると思うとうれしいわ。ねえ、パット、四週間したらここへもどれるってすばらしいわね!」と言うほど、学院が気に入ったのでした。そして、これに続くシリーズでは、クレア学院を舞台にしてさらにいろいろな出来事が起こり、ふたりは「独立心」と「責任感」を培い、成長していくのです。

人気を反映してか、テレビにもなりましたし、各国で翻案ものも作られました。特に、小学生の女の子に推薦したいと思います。また、ふたご特有のいろいろな喜びや葛藤の問題を扱っているというだけでなく、そもそも読書の喜びへと誘うことができる作品です。子ども時代に、繰り返し繰り返しはまったように読む、このような「耽読」(辻邦生)できる作品に出会うことができるとすれば何と幸せなこと

でしょうか!



ブライトン『おちゃめなふたご』書影

ブライトン『ふたごなふたご』（佐伯紀美子訳）ポプラ社文庫。シリーズ全6巻。

『ツインズ』47号（ビネバル出版）から転載・修正